

郎の子・三郎（歯科医）の時、四日市市に移転したが、現在
柘植家には、和綴筆写本の「口中薬方帳」「口中療治薬方
帳」「神氏眼科学図」があり、治療手用器具として、抜歯
器具、口中治療器具、木床義歯制作用具が多数ある。ま
た、蠟石を台にガラス製の瞳をつけた義眼、「御口中薬」の
木製印、さらにゴム床の義歯、入歯入目師の看板、西洋入
歯の看板も現存している。また、順慶の三男・正三郎の歯
科医への入門にあたっての「約定證券」の写もある。

（日本歯科大学）

21 オーブンループ並びにダブルループ プクラスプに就いて

平田 幹 男

部分的な義歯を口腔内に維持・安定させ十分に機能を営
ませるためには、クラスプの様な医師装置が必要である。
部分床義歯発達の一面は、従ってこの維持装置の発展の歴
史でもあった。演者は、これらの観点より第十八回、第十
九回日本歯科医史学会学術大会に於て、クラスプの発展史
について発表を行つて来た。今回も引き続き、クラスプの
一つの形態であるオープンループ並びにダブルループクラ
スプについて述べて見たい。

部分的な義歯を口腔内歯列に安定させる為のクラスプ
は、遊離端アーム型のクラスプが本来の形態として発達を
して来た。一腕鉤、二腕鉤、更には三腕鉤として夫々維持
力や目的により形態の違いを生みだしている。義歯の維持

力、鈎齒に対する把握力を増加させるためには、太く強固なアームが要求される事になる。しかしこれは反面鈎齒の植立、存続そのものを脅かすことがあると言うマイナス面を持つていることも指摘されて来た。太く頑丈なクラスプは歯牙周囲の自浄作用を阻害し、清掃の妨げになることも否定出来ない。出来るだけ細いアームで鈎齒を衛生的に保ちながら、必要な強度を確保するための手段として先人達は、ループクラスプを考案し実用化した。ループ形態を取る事により細いワイヤーを使用しながら、クラスプとしての強度を伸ばし、更に衛生的な一面を満足させる為に種々の形態のクラスプが発表され、用いられて来た。オープンループクラスプとしてデュラフォン、ジャクソン、ローチ、ゲーベルらのクラスプが挙げられる。またダブルループクラスプとしてはゴスリー、エースイッヒ、オトレンギー、ローチ等のものが挙げられる。今回はこれらに就いて述べてみたい。

(東京医科歯科大学歯科補綴学教室)

22 東京勸業博覧会の歯科出品物

(第二報)

歯磨および歯ブラシについて

○大橋 正敬・西山 實

東京勸業博覧会は、明治四十年三月二十日から同年七月三十一日まで、東京上野で、東京府主催で開催され、多くの歯科用品が出品された。我々はこれら出品物のうち、第一報として歯科器材について報告したが、今回第二報として歯磨および歯ブラシの出品物について報告する。

本研究には「東京勸業博覧会実記(高木栄吉・清宮秀之助編)」、「東京勸業博覧会受賞人名録(東京府編)」および「東京勸業博覧会審査報告(東京府編)」を主な資料として用い、歯磨はそれらの第八部第七十七類、歯ブラシは第十一部第六類を中心に調査を行ったところ、次のようなことが明らかになった。